

被災者への尊敬と哀悼があるか？

1. 福島県の災害記念施設

3月に入ってから、常磐線の夜ノ森駅、双葉駅、大野駅が完成し、14日に常磐線が全線開通した。双葉駅に隣接して「東日本大震災・原子力災害伝承館」が建設されており、今年の7月にオープンする予定である。現在知られている震災・原発災害を伝承する施設は下図のようなものである。

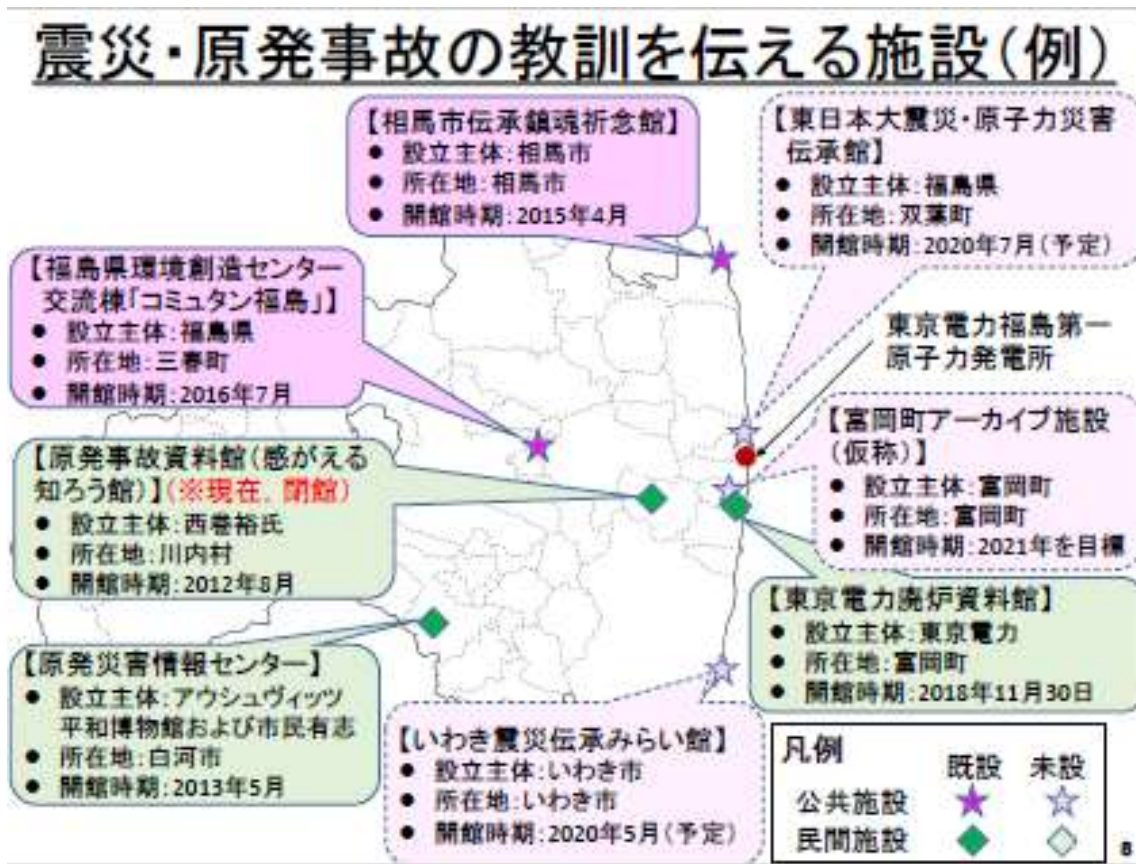


図1. 震災・原発事故の教訓を伝える施設(例) 出典：後藤忍「原発事故をどう伝えるか」

このうち、筆者らは三春町の「コミュタン福島」へは、開館から4カ月後の2016年11月と2019年3月に訪問した¹。その展示には、バラ色の福島県礼讃があふれていて、そもそもこの施設が設けられたきっかけの原発事故の原因究明、災害の実情、今後の政策転換に係る解説がきわめて希薄である。その不満に拙著で触れた。

「美しい福島自然」、「わが郷土・わが町」礼讃。その美しい自然を、町を、放射能で汚し、存

¹ 拙著『原発は終わった』 p.p.226-233、 同『原発フェイドアウト』 pp.220-221

亡の危機に陥らせたのは何だったのか？ 誰だったのか？ その張本人たちが、そのまま主導する復興計画「ふるさと回復」とは一体何なのだろう？²

2. 災害を伝承する言葉

双葉駅前の〈伝承館〉には、開館したら早速行かなければと思う。これらの展示施設を福島県は〈東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設〉と呼んでいる³。そして、そのアーカイブの動画をインターネット上に公開している⁴。

後藤忍氏（福島大学准教授）は、その講演資料「原発事故をどう伝えるか」で、アーカイブ拠点施設の資料映像（16分21秒）の内容を「教訓」と「挑戦」に分類した場合に、どのような割合で構成されているかを検証した結果をまとめている（図2）。

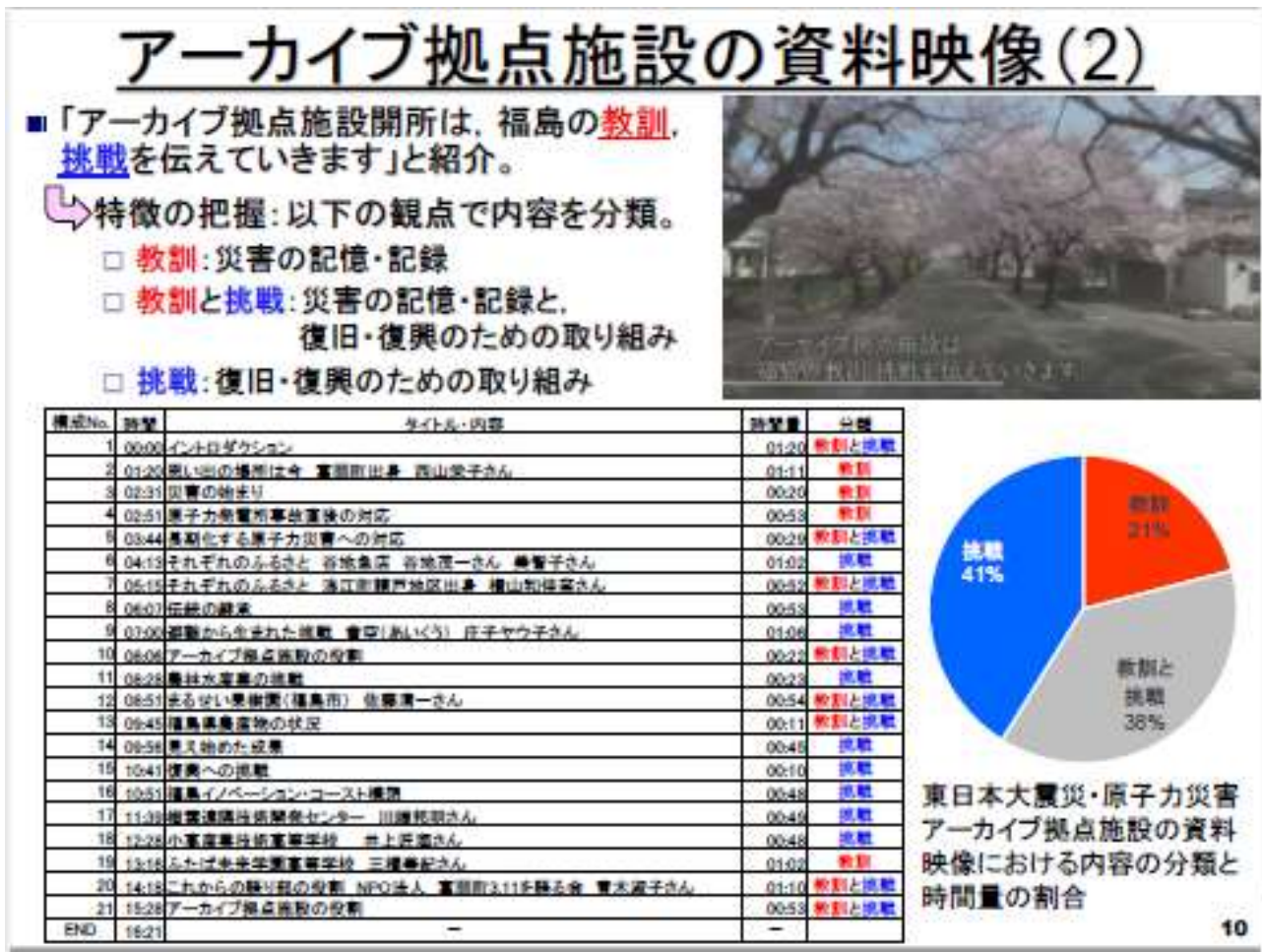


図2. アーカイブ資料映像の中の「教訓」と「挑戦」の割合

出典：後藤忍「原発事故の教訓をどう伝えるか」

² 前掲『原発は終わった』 p.232

³ 「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設の名称及び展示概要（案）について」

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/345658.pdf>

⁴ 「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設資料映像【本編】」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/archive-video.html>

後藤氏はこの講演資料の中で、「過去から学ぶことができない者は、それを繰り返す運命にある」というジョージ・サンタヤーナの言葉を引用している。

3. 「教訓」と「挑戦」という言葉

図2の映像部分を拡大すると図3になる。この画像は、資料映像の中ほどに現れる。記されている説明文は「アーカイブ拠点施設は福島の教訓と挑戦を伝えていきます」と述べている。



図3. アーカイブ拠点施設の目的を示す画面

出典：東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設資料映像【本編】<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/archive-video.html>

「教訓」と「挑戦」という言葉は私たちの日常生活にはなじみがない。しかし、会社勤めで、海外とのビジネスを経験した人たちには心当たりがあるであろう。これは品質管理の「PDCA サイクル」に似た業界用語で、元は英語から来た言葉である。

どの会社でも同種の業務を繰り返して熟練の度合いを高めていく必要がある。ひとつの仕事を終えるたびに、学んだ「教訓」(Lessons learned) と次回「挑戦」(Challenge) すべき事項を当事者たるチームメンバーたちが確認し合い、それを書き記して品質保証ファイルに蓄積していく。当然、この反省と次回に着手する業務の目標設定は、その仕事を行ったメンバーたちが、自発的に「学んだ教訓」を記録し、次の業務に際して自らに課す目標を「挑戦課題」として掲げる。

「教訓」(Lessons learned) には、学ぶ主体の人格がなければ意味をなさない。当然学んだことを記述し、その記述の信頼性を保証する Traceability が備わっていなければ意味をなさない。つまり、仕事の方針を決定した責任者が、自ら欠点の内容を記述して署名しなければならない。この双葉町における「ふるさと喪失」の原因はもちろん福島第一原発の過酷事故である。その事故を発生したことに責任を負う人びとが記述し署名した文書を提出して初めて「教訓」(Lessons learned) の記録が完成し、Traceability が備えられる。この映像には本来記述すべき「教訓」(Lessons learned) はほとんど見えない。ましてや責任者は隠されている。

「挑戦」にも今後課題を実現する主体の人格がなければならない。この映像に現れる原発被災者の方

がたは、原発災害によって避難した16万人のひとりとして苦勞された方がたであり、最近避難先から地元へ帰って来てなんとかここで生きていこうと決心されたばかりと見受けられる。地元再建の政策決定を行った主体は現れなくて、何となく状況がそうなっているという描き方である。つまり、風景はあるが、「なぜこの政策か？」という質問を受け付ける契機はない。さらに「今後どのようにして」という意見交換のきっかけは隠されている。〈コミュタン福島〉の映像には西田敏行が美しいふるさとを宣伝するという、一種の宣伝意図が明らかである。映画『Fukushima 50』には、俳優の演技によってある種の宣伝意図が表現されている。しかし、ここでの映像は、被災当事者が「教訓」と「挑戦」を語り掛けているという意味で、その人格主体の関係を見過ごすことができない。

そもそも、この映像は誰に向かって語り掛けようとしているのだろうか。地元の人々であろうか？他の地域からの訪問者であろうか？「地元の人びとが原発災害から学んで『教訓』を得た」と製作者の行政当局（福島県庁。予算は政府の復興財源）が勝手に主張しているのであれば、それは失礼である。さらに地元の被災者が、状況に合わせて立ち上がる「挑戦」の目標を語っているとしても、それを行政当局が喧伝してよいものでしょうか？被害者に頑張りを呼び掛けている「一億総懺悔」の構造になっているのではないかと。真の責任者は陰に隠れることによって、責任の明治と反省を逃れようとしているのではないかと。

4. 尊敬のないところに哀悼も生まれない

被災地には、これでもかというほど資金が投じられて、立派な公共施設（各町村の役場、公民館、道の駅など）や娯楽施設（体育館、レクリエーション施設など）が次々と作られている。しかし、住民の帰還率はきわめて低く、過半数の住民は帰らない。さらに、福島イノベーション・コースト構想を打ち上げ、南相馬市には「ロボット・テスト・フィールド」、浪江町には「水素製造施設」を建設した。楢葉町と広野町にまたがるJヴィレッジは宿泊施設を増設して旅客を呼び込もうとしている。それらの費用は、復興特別会計26兆円の中から支出されている⁵。しかし、これらの豪華なハコモノの数々は、住民の帰還を促進する効果を上げていない。かえって地道な人々のまちづくり・ふるさと再建の気持ちを逆なでしているように見える。

地元の人たちに、本当に望むものは何かを聞くのではなく、経済的な物量を浴びるように与えて、それを受け取らない者は反逆者扱いをするというのが、現政府の姿勢である。典型的には「金目でしょ？」という感性に象徴されている。ここには、人間としての同等の立脚点を認めていない。ギュンター・アンダースは、かのアイヒマンの息子であるクラウス・アイヒマンへの公開書簡の中で、「わたしたちが尊敬を捧げることができるのは、人間に尊敬を捧げる人に対してだけである」という「相互性の法則」であると指摘している。そして、かのアイヒマンについては、「彼は明らかに人間を尊敬しないことと、人間の生命を軽蔑することのみによって、自分を支えていたのです」と述べている⁶。

さらに、死者への尊敬があつてはじめて哀悼が生まれ、被災者への同情が生まれる。その哀悼と同情があつてはじめて、真の反省がなされる。現在の政府の状況認識は哀悼も同情もない。したがって、「反省」の必要も感じていない。反省のない気持ちは被災者の求めを聞く必要を認めず、お仕着せの見栄え

⁵ 古川美穂「復興予算26兆円の行方」『世界』2020年4月号・5月号

⁶ ギュンター・アンダース、岩淵達治訳『われらは、みなアイヒマンの息子』晶文社、2007年、pp.23-27

がする羽織をこれでもかと投げ与える。それが「教訓」＝「反省」の過少と、「挑戦」＝「復興」の過大である。

5. チェルノブイリの記念館とドイツの迫害記念館

チェルノブイリの原発事故を記念する博物館の内部は文字通り事故の悲劇を展示し、今そこで葬式を行っている教会内部のような作りになっている。2階の展示室には天使ミカエルの画像の壁面もあり、300人はいるかと思われる被ばくした子供たちの写真がびっしり並んでいる⁷。

ドイツの諸都市では、ユダヤ人迫害を記念して、その頃の蛮行を示す写真や新聞を壁一面に展示している。

チェルノブイリでもドイツでも、人々が自らの失敗や罪を忘れないように記念館を建てて、80年以上経った今も自らの罪を思って悔い改め、犠牲者に哀悼の意を表している。それに引き換え、日本では少なからぬ関連死の犠牲者がいるにもかかわらず、哀悼の場所もなく、失敗を反省して悔い改める手続きを省いて、バラ色の未来を期待することに集中している。事故は単なる天災のはずみに過ぎず、人間は行為を改める必要は一つもないようだ。

福島県内の震災関連死は2304人に達した⁸。沈思し哀悼する場所を備えるのがアーカイブ施設の役割ではないか。「復興」「挑戦 (Challenge)」といった活動は、目の前の事実を見てそれぞれの人が判断すればよいことだ。

6. 専門分化が人格を見失わせる

アイヒマンが歴史に残る壮大な陳腐さを発揮した原因についてギュンター・アンダースは、その重要な契機が現代社会の専門分化であると述べている。

私たちが関心を持つことが許されているのは、自分たちに報酬が支払われている分業の専門職の成果（中略）に限られているからでもあります。関心を持つことへの妨害は、連鎖的にもろもろの妨害を伴っていきます。なぜなら、もし私たちが想像を試みることが妨げられているとすれば、当然また失敗を体験することも妨げられているはずだからです。さらにそれによって、この経験のチャンス（すなわち警告）を知覚することも妨げられることになります。それによって最後には、怪物的なものに有効に抵抗することも妨げられてしまうのです。したがって今日労働に携わる何百万の人々が怪物的な仕事の共犯者であるとしても、罪なき共犯者であり続けることを、私たちが本当に容認する理由があるのです⁹。

実際今日の職場は、大きなシステムの中で専門家たちを組織化することによって初めて市場競争力のある企業活動が達成できる。各個人は、全体を把握することはできないし、最終製品がもたらす結果

⁷ 東浩紀篇『チェルノブイリ ダークツーリズムガイド』genron、2013年、pp.

⁸ 「震災の関連死、今年度32人 死から数年たって申請も」『朝日新聞 DIGITAL』2020年3月10日
<https://www.asahi.com/articles/ASN3934QXN2LUGTB017.html>

⁹ G. アンダース、前掲書 p.56

の責任を負わなくてもよい。たとえば、日本の原発業界に専門技術者は約3万人働いていると言われて
いる。そして、それぞれの専門分野はきわめて多岐にわたっており、個人の担当範囲は限られている。

「彼の掌握する機構が計画通りに始動した後、もう慣習と化してしまった日々の仕事をするうちに、本
来目指していた目標が次第に見えなくなってしまう¹⁰」ということになる。実際筆者が議論した原子力
分野の専門家たちは、むしろ狭い分野を深く極めていることを誇りとしていることが多かった。今日原
発産業を新たに設備化する仕事は考えられないにもかかわらず、その組織に若い技術者を雇用して「人
材育成」をしなければならないと主張している。

新しい設計条件の出現に対しては、これらの専門家は「自分の専門外」と片付けてしまうことを当然
とする。そうすると、いったんシステムの外延が規定されると、その外側に追いやられたリスクは「残
余のリスク」とされて、実質誰もケアしなくなる。プレートテクトニクスに基づく地震理論、歴史地震、
歴史上の津波履歴、火山噴火など、科学の進歩に伴って得られた知見、さらに予見不可能なテロ攻撃、
人為ミスなどは、ケアしないことを「社会通念」と見なして、視野から消してしまう。ましてや、その
ような「想定外事象」に起因して発生した被害者は、専門家にとっては「あってはならない存在」であ
り、居ないことにしたい。少なくとも「わたしが向き合う相手」ではない。こうして、彼らには、被害
の全貌が視野に収められなくなり、被害者の存在は知覚できなくなる¹¹。

システムの全体を見ず、事故の全貌を見ず、人間を対等の人格と見ない事故記述の上に語る「復興」
には、上辺のハコモノを並べることは可能でも、人間の復興は望めない。そのことが現在のアーカイブ
施設において如実に示されている。

¹⁰ G. アンダース、前掲書、p.58

¹¹ G. アンダース、前掲書、p.88